

## 『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注

—告解に対する聴罪司祭の訓誡—

Tradução integral portuguesa dos *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria de frei dominicano Diego Colhado: Admoestações do confessor para com as confissões

日 埜 博 司

2004年度リスボアにおける在外研修中、いろいろな方々の暖かい協力と指導とに浴し、ドミニコ会宣教師ディエゴ・コリヤードの著書『懺悔録』(1632年、ローマ刊)に収められた日本語テキスト全文へポルトガル語の訳注を施すという作業をひとまず終えることができた。この間の経緯については『流通経済大学社会学部論叢』通巻第30号所収の拙稿「コリヤード『さんげろく』葡語訳注雑感——在外研修余滴として」に記述した。前記葡萄牙語訳注はしかるべき準備期間を経、リスボアもしくはマカオで上梓したいと思う。

大塚光信によれば、『懺悔録』の内容は、

[A] 教義内容の宣言(原著4頁7行目から16頁8行目まで)

[B] 十誡および七大罪等に関する信徒の告解(原著16頁9行目から58頁26行目まで)

[C] [B]に対する聴罪司祭の訓誡(原著58頁29行目から64頁13行目まで)

の三部に分類される<sup>1</sup>。今回は[C]の全文に対して試みた葡萄牙語訳を掲載する。[B]に関してはひととおり訳出を終えているから、次回[A]を一挙訳載すれば『コリヤード 懺悔録』の全貌が初めてポルトガル語で示されることになる。

ちなみに上記[A][B][C]の区分を特に明らかにする見出しというか表題が原著に見えるわけではない。これを原著構成上のひとつの区切りと認めるのは、上記大塚の区分法を妥当と考えることによる。

罪のいちいちを後悔し勇気を奮ってそれを残らず白日のもとにさらけ出した信徒の勇気を褒め

<sup>1</sup> 大塚光信著『コリヤード さんげろく私注』臨川書店、1985年、87～89頁参照。大塚光信校注『懺悔録』岩波文庫、1986年、77頁参照。

讃え(「尤も科の数も深さもいかいことなれども、心底よりそれを一々後悔し、二度犯すまいと思ひ切つて、皆一つも残さず頭はしあつた、なう」)、そのように懺悔をなし遂げた以上、デウスの御慈悲は無限であるゆえ、お赦しを得ることはいとたやすいと心得よ(「さらば、斯様なる数々の深い科の御赦し、デウスの無量・廣大・無辺の御慈悲の為にはいと易いことぢやとこで、その分心得あれ」)という司祭の激励の言葉が終わると、下に列挙するとおりパードレによる訓誡の言葉がただちに現われる。

注意すべきことであるが、聴罪司祭の訓誡はキリシタン信徒の告解にことごとく対応してはいない。むしろ対応する訓誡は全体から見ればごく一部だと言ってよい。拙訳に掲げるそれぞれの訓誡には仮の見出しとして、第何誡の何番目の告解に対応したものであるかをポルトガル語で示した。

『コリヤード 懺悔録』の内容をざっと振り返り、かつまた信徒の告解に司祭の訓誡がどの程度対応しているかを確認するため、以下のような一覧を作成してみた。誡やモルタル科のナンブルは I や VI などのローマ数字で、何番目の告解であるかは 1 や 12 などのアラビア数字でそれぞれ表わし、告解の内容を略記したうえ、それに対応する司祭の訓誡が収載されている場合は●印を附す。ふたつ以上の告解文に対する答えがひとつの訓誡文に纏められていたり、ひとつの訓誡文がある告解文の一部にだけ対応したり、あるいはまた、ひとつの告解文に対する答えが複数の訓誡文に分かたれて記述されていたりというケースも散見されるため、下記一覧はあくまで参考程度のもに留まる。

### 第一誡

- I-1 キリシタンの諸事に対する不審
- I-2 ミサ典礼に対する不審
- I-3 キリシタンの諸事に対する過剰の穿鑿
- I-4 病気の息子のため山伏に祈禱をさせる●
- I-5 奉行の勧めに応じ口先で棄教する
- I-6 ゼンチョ寺の造営に従う
- I-7 十遍念仏を唱える●
- I-8 デウスへの信頼を失う
- I-9 デウスへの悪口を黙認する●
- I-10 わが身の境遇を嘆きデウスに対し腹立ちを覚える
- I-11 迷信(鳥の鳴き声に不吉を覚え、夢で見たことを真に受ける)を信奉する
- I-12 死後の審判の否定
- I-13 真摯な信徒に対する嘲り
- I-14 デウスの慈悲に信頼を置きつつ悪事を働く
- I-15 それがモルタル科であるかどうか迷いつつ悪事を働く

**第二誠**

- II-1 みずからの言葉の真偽を確かめぬまま誓文を立てる
- II-2 空誓文を立てる●
- II-3 デウスの名にかけて子供・奉公人を殺す誓文を立てる
- II-4 争いの仲裁者に復讐する誓文を立てる
- II-5 善事を為さぬ誓文を立てる
- II-6 道理のない訴訟に勝つため空誓文をさせる
- II-7 無用の誓文
- II-8 博奕を打たぬという誓文を破る
- II-9 食あたりの原因となった食物を食べぬという誓文を破る
- II-10 ミサに与り施しをするという誓文を破る
- II-11 安易な誓文で家族に悪い手本を見せる

**第三誠**

- III-1 ドミンゴ・祝い日のミサに与らず
- III-2 雑念のためミサに集中せず
- III-3 ドミンゴ・祝い日に働き、使用人にも働かせる

**第四誠**

- IV-1 姑との不仲と妻に対する虐待●
- IV-2 老人・貧人・身体障害者に対する嘲り
- IV-3 兄とのいさかい
- IV-4 パードレの名誉毀損に同心しその悪評を雑談の話題とする
- IV-5 配偶者に愠気し邪推する
- IV-6 家族にキリシタンとしての行儀を守らせることを怠る

**第五誠**

- V-1 少年に手淫を教える
- V-2 他人にモルタル科を犯させる
- V-3 知人の悪行に荷担する
- V-4 妻との折り合いが悪い嫁に殺意を抱く
- V-5 喧嘩の相手に傷を負わせる
- V-6 自分を悪く沙汰したことを謝罪した相手と和解せず●
- V-7 喧嘩口論をし悪口雑言を吐く
- V-8 虐待する夫の子を儲けぬためみずからの手で墮胎●
- V-9 避妊・墮胎・嬰兒殺害●

**第六誠**

- VI-1 妾との姦淫, 妾に想いを掛けつつ妻と交わる, 妻との肛門性交, 妾との情事を思い  
つつ精を漏らす
- VI-2 未婚女性との姦淫, 精液の無益な放出
- VI-3 有夫者——処女(!)——との姦淫
- VI-4 有夫者との姦淫に際し避妊措置を施す
- VI-5 美女を妄念によって姦淫する(未遂・既遂とも)
- VI-6 強姦未遂, 精液の無益な放出
- VI-7 不犯の願を立てた女性の手淫
- VI-8 不犯の願を立てた女性の姦淫, 相手の男に肛門性交を勧める, 避妊措置を施す
- VI-9 男との間で妄念による姦淫を犯す
- VI-10 夜這い男を寝所で拒絶する
- VI-11 上記の男を受け入れる
- VI-12 南蛮人の伽をする, 遊女となって避妊措置を施す
- VI-13 男色・手淫を犯す, 有夫者・未婚者・処女との姦淫, 結婚詐欺的行為, 姦淫の相手  
を妾に囲う●
- VI-14 みずからの淫蕩を誇る, 獣姦を犯す
- VI-15 色事の仲介をする

**第七誠**

- VII-1 拾得したかねを取り込む
- VII-2 給金の未払い
- VII-3 商品の持ち逃げ
- VII-4 盗品故買, 瑕疵品の意図的売却●
- VII-5 賭け将棋による不当利得
- VII-6 借金の未返済
- VII-7 高利の取り立て●
- VII-8 過分の役得●
- VII-9 労働対価の現物支給, 怠慢によって主人に損を与える
- VII-10 年貢納入の厳しい督促

**第八誠**

- VIII-1 他人に関する邪推を語り広める●
- VIII-2 気にそぐわぬ者の悪評を鵜呑みにする
- VIII-3 秘密に聞いた他人の醜聞を他言する
- VIII-4 根拠なく他人を邪推してそれを他言する

- VIII-5 陰で他人を誇る, 人と人の仲を裂くため片方を悪く言う●
- VIII-6 誇った相手と絶交状態に陥る
- VIII-7 実害のない嘘を頻繁に言う

### 第九誠と第十誠

- IX [X]-1 他人の財宝や配偶者を盗もうと望む

#### 一番(驕慢)

- I-1 作り事の手柄話を語る
- I-2 己の精力絶倫を自慢する
- I-3 他人を見下し自惚れる
- I-4 己が長所を自画自讃する
- I-5 他人の目につくよう善事を行なう

#### 五番(貪食・暴食)

- V-1 酒を飲みすぎ本性を失い嘔吐する
- V-2 客人と痛飲し二日酔いする
- V-3 ゼジュン(断食)の期間に肉食をする
- V-4 一食ゼジュンの禁を犯す
- V-5 飲食・睡眠の中庸を守らず

#### 六番(嫉妬)

- VI-1 己と同程度の者が富者になったことを嫉む

#### 二番(貪欲)

- II-1 訴訟に際して賄賂を取る●\*

\* 大塚光信は「七つのモルタル科」について本書で扱われる告解は一番・五番・六番に関わるものだけであると述べているが(大塚光信校注『懺悔録』岩波文庫, 1986年, 77頁, 脚注一), この告解が六番「嫉妬」に関連ありとは考えにくい。二番「貪欲」に関わるものとするのがより自然ではなからうか。

#### 慈悲の所作\*

- 1 異教徒のオランダ人海賊へ武器・弾薬を売る
- 2 パードレに宿を貸さぬという誓文を立てる約束をし, 隣人にもその旨勧める
- 3 パードレに宿を貸さぬという誓文を立てる(一度は神・仏に掛けて, 一度は本のデウスに掛けて, 一度は村の乙名らに命ぜられて)●

\* 大塚光信は「慈悲の所作」について本書で扱われる告解を1だけであるとして, 2および3に対しては「キリシタンの妨げについて」という標題を「私に設け」ている(同上書, 82頁, 脚注六。大塚光信著『コリヤードさんげろく私注』臨川書店, 1985年, 87~89頁参照)。「キリシタンの妨げ」という表現は『懺悔録』原著の本文に実際用いられているものではある(p.56, l.13)けれど, 標題として採用するほどの汎用性・独立性を有するものであるのか否か訳者は知らない。「慈悲の所作」と言うなら, むしろ上記

の2と3こそそれに該当するのではあるまいか。ラテン文字版、1592年、天草刊『どちな・きりしたん』に「慈悲の所作」のひとつとして「行脚の者に宿を貸す事」が挙げてあるというのが、上記のように愚考する訳者なりの根拠である。1に関してとりあえずはコリヤードの分類どおりこの項目に入れておくと、この行為がなぜ「慈悲の所作」に反する科であるのか訳者には理解しにくい。

**ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA A QUARTA CONFISSÃO ACERCA DO PRIMEIRO  
MANDAMENTO**

Sari nagara, sucoxi zzutçu no cocoroie<sup>2</sup> ga iru: mazzu musuco dono no vazzurai no jibun ni, nido iamabuxi vo iobi ioxe<sup>3</sup>, inori<sup>4</sup> qitô<sup>5</sup> vo saxe, fudamaburi vo caqe saxeta nitçuite, nauo mata ichido ni, cami fotoqe vo tanomoxũ zonjite sô itaita coto gozaru. Sore va cõquai to, mata futatabi<sup>6</sup> itasu mai tono cacugo no vie ni, mixirareta<sup>7</sup> xu no maie de xinauosaide<sup>8</sup> va.

さりながら、<sup>すこ</sup>少しづつ<sup>こころえ</sup>の心得<sup>い</sup>が要<sup>ま</sup>る。先<sup>むす</sup>づ息<sup>こどの</sup>子<sup>わづら</sup>殿<sup>じぶん</sup>の患<sup>い</sup>ひの時<sup>じ</sup>分に、  
に<sup>に</sup>ど<sup>やまぶし</sup>山<sup>よ</sup>伏<sup>よ</sup>を呼<sup>い</sup>び寄<sup>きたう</sup>せ、祈<sup>ふだまぶり</sup>り・祈<sup>か</sup>禱<sup>か</sup>をさ<sup>せ</sup>せ、札<sup>か</sup>守<sup>か</sup>を掛<sup>か</sup>けさせ<sup>た</sup>たにつ<sup>い</sup>て、  
な<sup>い</sup>ほ<sup>ち</sup>また<sup>かみ</sup>一<sup>ほとけ</sup>度<sup>たの</sup>に、神<sup>も</sup>・仏<sup>ぞん</sup>を頼<sup>ぞん</sup>母<sup>いた</sup>しう存<sup>いた</sup>じてさ<sup>う</sup>致<sup>いた</sup>したこと<sup>ご</sup>ご<sup>ざ</sup>る。それ<sup>は</sup>は後<sup>こう</sup>  
<sup>くわい</sup>悔<sup>ふたたびいた</sup>と、また<sup>か</sup>二<sup>かく</sup>度<sup>ご</sup>致<sup>うへ</sup>すま<sup>み</sup>いと<sup>し</sup>の覚<sup>しゅ</sup>悟<sup>まへ</sup>の<sup>なほ</sup>上<sup>は</sup>に、見<sup>み</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>れ</sup>た衆<sup>しゅ</sup>の前<sup>まへ</sup>で<sup>なほ</sup>し直<sup>なほ</sup>さい  
では。

とはいえ、なお多少の心得が必要である。まず御子息の病のときに二度山伏を呼び寄せ、祈

<sup>2</sup> Cocoroye [心得]. *O aduirtir, ou entender (Vocabulario, f.53v).*

<sup>3</sup> Yobiyoxe [呼び寄せ], Yobiyosuru [呼び寄する], Yobiyoxeta [呼び寄せた]. *Chamar a outro pera si (Vocabulario, f.322).*

<sup>4</sup> Inori [祈り]. *Deprecações gentílicas (Vocabulario, f.132).* «nori» in textu.

<sup>5</sup> Qitô [祈禱]. Inori [祈り], Inoru [祈る]. *Deprecações. Vt, Qitôuo suru [祈禱をする] (Vocabulario, f.200v).*

<sup>6</sup> «futabi» in textu. «Futatabi», que é o advérvio comuníssimo actual e que aparece várias vezes no texto de frei Colhado, curiosamente não se regista no *Vocabulario*.

<sup>7</sup> Mixiri [見知り], Mixiru [見知る], Mixitta [見知った]. *Conhecer. ¶ Miuo mixiru [巴・身を見知る]. Conhecerse a si mesmo (Vocabulario, f.162v).*

<sup>8</sup> Xinauoxi [し直し], Xinauosu [し直す], Xinauoiita [し直いた] *Emendar algũa cousa. (Vocabulario, f.302v).*

り・祈禱をさせ、お守り札を掛けさせたり、さらに一度、神・仏に頼みを掛けて、そのように致したりした由だが、これは良くない。後悔の気持ちと、再び決してそのようなことは致さぬとの覚悟を持ち、お前のことを見知った衆の前で、前非を否定せねばならぬ。

*Sed sunt aliquæ aduertentiæ necessariæ in primis circa hoc quod est vocasse ariolos tempore infirmitatis filij et fecisse deprecationes gentilicas, et nomina infirmi collo, et domi appendisse, semel cum spe et confidentia erga Deos gentilium: est necessarium; præter pœnitentiam, et propositum non reincidendi; quòd fiat per te satisfactio coram ijs, qui de hoc notitiam habuerunt.*

Today é necessário ter algumas advertências. Quanto ao terdes convidado duas vezes um «Yamabuxi» a oferecer uma prece e a pendurar um talismã no corpo do vosso filho quando estava doente, e ao vos terdes encomendado aos Camis e Fotoques, fazendo a mesma reza para a sua melhoria, isso não é perdoável. Deveis manifestar a vossa determinação, com toda a contrição, de emendar-vos e nunca mais fazer tal coisa à vista daqueles que vos conhecem.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA A SÉTIMA CONFISSÃO ACERCA DO PRIMEIRO  
MANDAMENTO

Mata gentio dera ni itte jünen xita coto no vie ni, ano tocoroie modori<sup>9</sup> arõ toqi va, fon no Christian degozaru, ano gentio iori mixiraruru tameni, sore teraie iqareôzu vo to/p.60/mo xezu, mata cami fotoqe no coto vo fôbi xerareô toqi mo, vqegavanu nominarazu, caiette christian no fon no Deus no von voxiiie bacari ichi sugureta xũ<sup>10</sup> de gozaru to, sono gentio no maie de mõi furaxi<sup>11</sup> araide naranu.

また、ゼン<sup>でら</sup>チョ<sup>い</sup>寺<sup>じふねん</sup>に入<sup>うへ</sup>って十<sup>ところ</sup>念<sup>もど</sup>した<sup>とき</sup>ことの上<sup>うへ</sup>に、あ<sup>ところ</sup>の<sup>もど</sup>所<sup>もど</sup>へ<sup>とき</sup>戻<sup>とき</sup>りあ<sup>とき</sup>らう<sup>とき</sup>時<sup>とき</sup>

は、本<sup>ほん</sup>の<sup>ほん</sup>キ<sup>ほん</sup>リ<sup>ほん</sup>シ<sup>ほん</sup>タ<sup>ほん</sup>ン<sup>ほん</sup>で<sup>ほん</sup>ご<sup>ほん</sup>ざ<sup>ほん</sup>る、あ<sup>ほん</sup>の<sup>ほん</sup>ゼ<sup>ほん</sup>ン<sup>ほん</sup>チ<sup>ほん</sup>ョ<sup>ほん</sup>よ<sup>ほん</sup>り<sup>ほん</sup>見<sup>ほん</sup>知<sup>ほん</sup>ら<sup>ほん</sup>る<sup>ほん</sup>る<sup>ほん</sup>為<sup>ほん</sup>に、そ<sup>ほん</sup>れ<sup>ほん</sup>寺<sup>ほん</sup>へ

行<sup>い</sup>か<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ず<sup>い</sup>お<sup>い</sup>供<sup>い</sup> /p.60/ せ<sup>い</sup>ず、ま<sup>い</sup>た<sup>い</sup>神<sup>い</sup>・<sup>い</sup>仏<sup>い</sup>の<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>を<sup>い</sup>褒<sup>い</sup>美<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>時<sup>い</sup>も、<sup>い</sup>諾<sup>い</sup>

<sup>9</sup> Modori [戻り], Modoru [戻る], Modotta [戻った]. *Tornarse (Vocabulario, f.164v).*

<sup>10</sup> «xũ» in *textu*.

<sup>11</sup> Mõi furaxi [申し触らし], Mõi fururu [申し触るる], Mõi fureta [申し触れた]. *Apregoar, fazer a saber (Vocabulario, f.168).*

はぬのみならず、却<sup>かへ</sup>ってキリシタンの本<sup>ほん</sup>のデウス<sup>おんをし</sup>の御<sup>い</sup>教<sup>ちゆう</sup>えばかり一<sup>いち</sup>勝<sup>しゆう</sup>れ  
た宗<sup>しゆう</sup>でござると、そのゼン<sup>まへ</sup>チョ<sup>まう</sup>の<sup>ふ</sup>前<sup>まへ</sup>で申<sup>まう</sup>し触<sup>ふ</sup>らしあらいでならぬ。

また、ゼンチョ寺に入って十返念仏を行なったことに関しては、次のように申し戒める。ああした所へまた行くことがあれば、そのときこそみずからは真のキリシタンであると明言せよ。そしてかのゼンチョたちにもはっきりと分かるよう、自今私は寺へは行かずお供もせず、また他人が神・仏のことを讚美するときもそれに同意するようなことはしない、そればかりか、キリシタンの真のデウスの御教えのみが一番すぐれたものでござると、かのゼンチョたちの前ではっきりと公言せよ。

*Præterea circa hoc quod est intrasse templum idolorum, et ibi gentilicas deprecationes fecisse: quando reuerteris ad illum locum vt illi gentiles sciant, te esse Christianum: quando huiusmodi /p.61/ pergunt ad sua templa, illos ne comiteris: quando verò audieris illos collaudantes suos Deos, & idola, non solum non assentias; sed potius laudes, & supremam, & veram doctrinam dicas legen veri Dei, & hoc coram ipsis gentilibus publiques.*

No que diz respeito ao teres feito «Iūnen» [isto é, teres invocado dez vezes o nome de «Amida» num templo dos gentios], admoesto-te a declarar que és um cristão verdadeiro caso visitares outra vez tal local, e a dar-lhes a conhecer que não vais nem acompanhas a tal templo a partir de agora. Admoesto-te também a nunca mais louvares Camis e Fotoques, e a declarares à vista dos gentios que só a doutrina do «fon no Deus», ou seja, a do Deus autêntico é boa por excelência.

#### ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA A NONA CONFISSÃO ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

Sono uie: tanin<sup>12</sup> Christian no coto vo soxiri, Deus ni taixite<sup>13</sup> accô zõgon o<sup>14</sup> facu mono ni ai arõzuru toqi va, sono voncata no uon fomare

<sup>12</sup> «tannin» in textu.

<sup>13</sup> «xaixite» in textu.

<sup>14</sup> «zõgonho» in textu. Não se sabe se se deveria corrigir para uma forma mais normal «guaibun vo», ou para «guaibunno» de acordo com a descrição já citada do padre João Rodrigues Tçuzu na sua *Arte da Lingoa de Iapam* (f.177v), ou para «zõgon o» de acordo com a observação já mencionada do nosso frei dominicano vista na sua *ARS GRAMMATICÆ IAPONIÆ LINGVÆ* (p.63).



no nozomi ni moie tatte, gentio no mafô<sup>15</sup> vo saguesunde<sup>16</sup>, tada Deus no  
 minori<sup>17</sup> no coto vo fome aguerareide va. Sono foca camaite<sup>18</sup>, ioi  
 cagami vo mixeraruru xu no coto voba ai soxiri aru na; qeccu sorerano  
 miôqiô<sup>19</sup> vo manabi<sup>20</sup>, Deus no gonaixô ni ai tatematçuraruru iõni xei vo  
 ire, von taiori<sup>21</sup> vo tanomi tatematçutte iô gozarõ made.

その上、他人キリシタンのことを誇り、デウスに対して悪口・雑言を吐く  
 ものに逢ひあらうずる時は、その御方の御誉れの望みに燃え立って、ゼン  
 チョの魔法を蔑んで、ただデウスの御法のことを褒め上げられいでは。

<sup>15</sup> Mafô [魔法]. Tenguno nori [天狗の法]. *Lei do diabo (Vocabulario, f.149).*

<sup>16</sup> Saguesumi [下げ墨み], Saguesumu [下げ墨む], Saguesunda [下げ墨んだ]. *Deitar prumo, ou linha como fazem os carpinteiros pera ver se està direita algũa cousa.* ¶ Iyeuo saguesumu [家を下げ墨む]. *Deitando a linha ver se està a casa direita.* ¶ *Per met.* Fitouo saguesumu [人を下げすむ]. *Olhar, ou considerar a alguem, ou ponderar suas qualidades, ou interior, &c. às vezes se toma por ver, & penetrar alguem tendo delle menos cõceito (Vocabulario, f.215v).* Parece-me que o sentido do verbo «Saguesumu» como é registado no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* é bem diferente do sentido do mesmo empregado no presente contexto, ainda que se veja no mesmo verbete o sentido metafórico mais ou menos aproximado ao do verbo «Saguesumu» como é utilizado aqui. O verbo «Sague iyaximuru» [下げ卑しむる] definido no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* como «Desprazer, ou abater a outro» (f.215v) tem exatamente o mesmo sentido que o verbo «Saguesumu» aqui utilizado. «sague fünde» *in textu.*

<sup>17</sup> Nori [法]. *Ley.* ¶ Noriuo firomuru [法を弘むる]. *Dilatar a ley.* ¶ Noriuo toqu [法を説く]. *Prègar a ley (Vocabulario, f.185v).* Cf. Mi [御]. i, Vo [御]. *Particula de honra. Vi, Mite, miaxi, &c [御手, 御足, 等]. Mãos, & pees de pessoa alta, ou sancta (Vocabulario, f.157v).*

<sup>18</sup> Camaite [構ひて], l, Camayete [構へて]. *Guardai vos, ou olhai por vos (Vocabulario, f.34).*

<sup>19</sup> Miôqiô [明鏡]. Aqiracana cagami [明らかな鏡]. *Espelho claro.* ¶ *Per met.* Miôqiôduo terasu [明鏡を照らす]. *Dar bom exemplo (Vocabulario, f.162).*

<sup>20</sup> Manabi [学び], Manabu [学ぶ], Manõda [学うだ]. *Imitar, ou aprender (Vocabulario, f.150v).* Cf. Manabi [学び]. *Imitação, ou aprender. Vi, Ienno manabiuo suru [善の学びをする]. Imitar, ou aprender a virtude (Vocabulario, f.150v).*

<sup>21</sup> Tayori [頼り]. *Portador, ocasião.* ¶ *Item, Ajuda, ou cousa que serue, presta, &c. Vi, Fitono tayorini naru [人の頼りになる]. Prestar, ou ajudar a alguem (Vocabulario, f.244).*

その外、構ほかいて良かまい鑑よを見かがみせらるる衆みのことをばあしゆひ誇そしりあるな。結句けっく

それらの明鏡みやうきやうを学ごび、デウスの御内証ごないしやうに逢あひ奉たてまつらるる様やうに精せいを入れ、

御頼おんたよりを頼たのみ奉たてまつってようござらうまで。

さらに、クリシタンのことを誇りデウスに対する悪口雑言を吐く者に遭うたときにも、この御方(デウス)を賞讃しようとする希望を燃やし、ゼンチョの魔法を蔑み、ただデウスの御法のことのみを褒め上げずして何とするのか。そのほか、クリシタンとして立派な模範を示してくれる衆のことをば誇るなどもつてのほか、さようなことがあつては決してならぬ。かえって彼らの亀鑑に学び、デウスの御意志に副い奉るように精励し、デウスの御助けを頼み奉るこそ良きこととごぞろう。

*Præter hoc: si forte aliquos de rebus Christianis murmurantes, vel contra Deum blasphemantes, audieris & obuios habueris, accensus zelo laudis maiestatis Dei & despiciens, & conculcans diaboli fectas, est necessarium quod laudibus efferas legis sanctæ Dei diuina mysteria. insuper caueas ne murmures de personis virtuosis, quæ bonum exemplum ostendunt; imo earum exempla imitans, procura placere Deo, & ad hoc diuinum auxilium si implores erit bonum.*

Quando te encontrares com pessoas que caluniam as coisas dos cristãos e digam palavras injuriosas contra Deus, não hesites em «arder no desejo» de louvar a Deus e tecer os maiores elogios às leis divinas, desprezando a lei diabólica dos gentios. Não debes caluniar os comportamentos daqueles que dão bom exemplo de virtude a todos os cristãos, pois se trata de uma acção absurda e imperdoável. Será aconselhável, pelo contrário, imitares e aprenderes esse bom exemplo e fazeres os mais sinceros esforços por agradar à vontade de Deus, assim te encomendando à ajuda divina.

#### ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA A SEGUNDA CONFISSÃO ACERCA DO SEGUNDO MANDAMENTO

Niban no go voqite nitçuite: sonata<sup>22</sup> mo tate, fito ni mo saxeatta sora jeimon de tanin vqerareta son, ata voba, tçui<sup>23</sup> navosaide canavanu. Xisai

<sup>22</sup> Sonata [そなた]. *Vos, ou vossa merce* (Vocabulario, f.225).

<sup>23</sup> Tçui [つい]. *Palavra que jûta aos verbos denota pressa, ou algũa energia, & vigor, & às vezes no mais que elegancia. Vi, Tçui caqu* [つい書く]. *Escreuer depressa, ou facilmente.* ¶ Tçuimodoru [つい戻る].

va sore vo xeide toga no von iuruxi catçute<sup>24</sup> gozaru mai.

に ばん ご おきて た ひと そら せいもん た  
 二 番 の 御 掟 に つい て。 そ な た も 立 て， 人 に も さ せ あ っ た 空 誓 文 で 他  
 にん う そん あた なほ かな し さい  
 人 受 け ら れ た 損 ・ 仇 を ば， つ い 直 さ い で は 叶 は ぬ。 子 細 は そ れ を せ い で  
 とが おん ゆる かつ  
 科 の 御 赦 し 曾 て ご ざ る ま い。

二番の御掟について。貴殿も立てかつは人にもさせた空誓文によって第三者の被った損害はすぐにも償わねばならぬ。そうすることなくして科のお赦しは決してござるまい。

*Circa quintum præceptum: est necessarium restituere damna & præiudicia, quæ alijs superuenerunt ex tuis falsis iuramentis, tam ex his, quæ tu fecisti; quam ex his quæ facere fecisti, si hoc ita non facias; non erit peccatorum venia.*

Quanto ao segundo mandamento de Moisés: vós não deveis deixar de recompensar desde já a perda e o dano que outras pessoas receberam devido ao vosso falso ou fingido juramento, juramento esse que não só fizestes mas também obrigastes outrém a fazer. Não serão, de modo nenhum, perdoados os vossos pecados se não o cumprirdes.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA A PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DO QUARTO  
 MANDAMENTO

Mata, xütomego<sup>25</sup> to nacanavori xite, tagai ni maie no aiamari<sup>26</sup> vo coi, ma ichido saiõnaru savari<sup>27</sup> ga nai iõni xite coso iocarõzure.

また、姑 御と仲直りして、互ひに前の 誤りを乞ひ、ま一度左様なる障

---

*Tornar depressa.* ¶ Tçuífatasu [つい果たす]. *Acabar algũa cousa depressa* (Vocabulario, f.246v).

<sup>24</sup> Catçute [曾て]. *Adu. De nenhũa qualidade, ou nõqua, sempre se junta com negatiuos* (Vocabulario, f.43v).

<sup>25</sup> «Xütomego» é a palavra composta por «Xütome» - «sogra» (Vocabulario, f.315) - e «Go» - «He particula de hõra» (Vocabulario, f.119v).

<sup>26</sup> Ayamari [誤り]. *Falta, erro, culpa.* ¶ Ayamariuo aratamuru [誤りを改むる], 1, Ayamariuo nauosu [誤りを直す]. *Emendar as faltas.* ¶ Ayamariuo cô [誤りを乞ふ]. *Pedir perdão da culpa, ou erro* (Vocabulario, f.17).

<sup>27</sup> Sauari [障り]. *Impedimento, ou estoruo.* ¶ Sauariuo suru [障りをする]. *Impedir, ou fazer estoruo* (Vocabulario, f.220v).

りが無い<sup>な</sup>様に<sup>やう</sup>してこそよからうずれ。

また姑御とは必ず仲直りして、相互に以前の過ちを陳謝し合い、二度と再びさような差し障りの起きぬようにするのがよろしかろう。

*Etiã est necessariũ, quòd amicitia facias cum tua socru. erit etiam bonum quòd ad inuicem præteritorum veniam petatis & faciatis sic, vt deinceps non sint inter vos præterita obstacula.*

Terás que fazer as pazes com a tua sogra, perdoar-vos um à outra, e tal discórdia deverá nunca mais acontecer.

#### ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A SEXTA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO

##### MANDAMENTO

Mata iuruxi vo coini iarareta fito to naca<sup>28</sup> vo navoxi, sore to cotoba vo cavaxi, maie no qigacari<sup>29</sup> ga iamuru iõni mesareio.

また、赦<sup>ゆる</sup>しを乞<sup>こ</sup>ひに遣<sup>や</sup>られた人<sup>ひと</sup>と中<sup>なか</sup>を直<sup>なほ</sup>し、それと<sup>こと</sup>言葉<sup>ば</sup>を交<sup>かは</sup>し、前<sup>まへ</sup>の気<sup>き</sup>懸<sup>が</sup>かりが止<sup>や</sup>むる<sup>やう</sup>様に<sup>め</sup>召<sup>め</sup>されよ。

また、赦して欲しいとやってきた人と仲直りをし、その人と言葉を交し、それまで気懸かりとなっていたことをなくすようになされよ。

*Facias amicitiam cum illo qui ad petendam veniam ad te misit, & ipsum alloquaris & ita facito vt cessent, quæ antea cor vestrum lædebant.*

Mais: vossa mercê terá que fazer as amizades com a pessoa que mandou-lhe pedir desculpas e converse com ela, fazendo com que cesse a vossa preocupação anterior.

#### ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM AS OITAVA E NONA CONFISSÕES ACERCA DO

##### QUINTO MANDAMENTO

Votto no aru vonna bexxite<sup>30</sup>, vazato<sup>31</sup> co vo voroxi, fumi corosu tô va

<sup>28</sup> Naca [仲]. *Dentro, meo, entre, &c.* ¶ *Item, Amizade.* ¶ Nacauo chigõ [仲を違ふ]. *Quebrar a amizade.*

¶ Nacauo nauosu [仲を直す]. *Fazer as amizades (Vocabulario, f.173).*

<sup>29</sup> Qigacari [気懸かり・気掛かり]. *Escrupulo, inquietaçam, & affliçam interior (Vocabulario, f.370v).*

<sup>30</sup> Bexxite [別して]. *Adu. Particularmente (Vocabulario, f.22).*

<sup>31</sup> Vazato [態と]. *Adu. De proposito, ou acinte (Vocabulario, f.133v).*

nasaqe nai<sup>32</sup>, jifi mo mixiranu cocoro no xiruxi<sup>33</sup> dea<sup>34</sup> tocorode, ima iori nochi, go facarai ni macaxete, tatoi<sup>35</sup>, catçue<sup>36</sup>temo, futatabi sō itasu mai to vomoi sadame are.

を<sup>つと</sup>夫のいる女, <sup>をんな</sup>別して<sup>べつ</sup>態<sup>わざ</sup>と<sup>こ</sup>子を<sup>お</sup>墮<sup>ろ</sup>し, <sup>ふ</sup>踏<sup>ころ</sup>み<sup>とう</sup>殺<sup>なさ</sup>す<sup>じ</sup>等<sup>ひ</sup>は情<sup>け</sup>け<sup>な</sup>い, 慈<sup>じ</sup>悲<sup>ひ</sup>も  
見<sup>み</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>こ</sup>ぬ<sup>ころ</sup>心<sup>しる</sup>の証<sup>し</sup>であ<sup>いま</sup>と<sup>のち</sup>ころ<sup>ご</sup>で, <sup>は</sup>今<sup>か</sup>より<sup>ま</sup>後<sup>か</sup>, <sup>た</sup>御<sup>と</sup>計<sup>ひ</sup>ら<sup>かつ</sup>ひ<sup>つ</sup>に<sup>つ</sup>任<sup>つ</sup>せて, <sup>た</sup>仮<sup>と</sup>令<sup>ひ</sup>飢<sup>かつ</sup>ゑ  
ても, <sup>ふ</sup>二<sup>た</sup>度<sup>た</sup>さ<sup>い</sup>う<sup>た</sup>致<sup>お</sup>す<sup>も</sup>まい<sup>さ</sup>と思<sup>さ</sup>ひ<sup>だ</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>め</sup>れ。

夫のいる女がわざと子を墮ろし, 踏み殺す等は, 情けなく慈悲のかけらも見えぬ心の証であるので, 今より後, デウスの御計らいに任せて, たとい飢えても, 二度とそういうことは致さぬと思ひ定めよ。

*Mulier coniugata, quae prolem aboriri facit, aut filium iam ortum conculcando occidit, est signum quod sit crudelis, & quid sit cor misericors ignoret: vnde in posterum te Dei providentia subiiciendo, etiam si fame pereas, debes proponere quod hoc amplius non committes.*

Uma mulher casada particularmente como tu abortar de modo intencional ou pisar o recém-nascido e matá-lo evidencia o teu coração cruel e impiedoso, pelo que, a partir deste momento, deves decidir, encomendando-te à providência divina, nunca mais fazer tal coisa, se bem que estejas a passar muita fome.

<sup>32</sup> Nasaqenai [情けない]. *Cousa cruel, ou sem piedade.* Nasaqenasa [情けなさ]. Nasaqenô [情けなう]. *Adu.* (*Vocabulario*, f.178v).

<sup>33</sup> Xiruxi [印・徴・験]. *Sinal, ou mostra dalgũa cousa.* ¶ Xiruxiuo tçuquru [印を付くる]. *Por, ou pegar sinal.* ¶ *Item, Efeito como dalgũa mezinha, &c* (*Vocabulario*, f.306v).

<sup>34</sup> Quanto à terminação «Dea», o padre João Rodrigues Tçuzu explica-a na sua gramática: «*Acabase, Dea, por Dearu. Vt, Mina xitta cotodea. i. Gia. Onde se aduirta que, Gia, he, Dea, & alguns o pronunciam, Gia, posto que nem he, Dea, nem, Gia, mas hum meyo que mais começa por D, que por G, cuja causa pode ser que toquemos quando falarmos do modo de pronunciar*» (*ARTE DA LINGOA DE IAPAM COMPOSTA PELLO Padre Ioão Rodriguez Portugues da Cõpanhia de IESV diuidida em tres LIVROS*, Nangasaqui, 1604, f.153v).

<sup>35</sup> Tatoi [仮令]. *Conjunção. Ainda que sempre precede, & depois se segue Tomo [とも]. Vt, Tatoi toqi utçuri, coto sarutomo [仮令時移り, 事去るとも]. Ainda que o tempo, & tudo passe, &c* (*Vocabulario*, f.243).

<sup>36</sup> Catçuye [餓ゑ], Catçuyuru [餓ゆる], Catçuyeta [餓ゑた]. *Morrer de fome, ou passar grande fome* (*Vocabulario*, f.44v).

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A DÉCIMA TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DO  
SEXTO MANDAMENTO

Nhõbõ ni torõ to iũte fubon no vonna vo votoxiatta coto no toga va, sono iacusocu vo togezu xite iurusare mai to cocoroieare. Tadaxi iõsu<sup>37</sup> gavari<sup>38</sup> ga atte, sõ naranu ni voiteva, xemete sono cavari ni niai no<sup>39</sup> coto voba sono vonago ni iarareide va. Vonajiqu<sup>40</sup>: iroiro no iacusocu de tabacatta fubon no vonago ni, sono iacusocu ni xitagatte tçutome<sup>41</sup> vo mesareio.

女房にとらうと言うて不犯の女を落としあつたことの科は、その約束を  
遂げずして赦されまいと心得あれ。ただし様子変はりが有つて、さうなら  
ぬにおいては、せめてその替はりに似合ひのことをばその女に遣られ  
いでは。同じく、色々の約束でたばかった不犯の女に、その約束に随  
つて勤めを召されよ。

女房にしてやろうと言うて不犯の女、すなわち貞節を守っている女性を犯したことの科について、その約束をきちんと守らぬ限りお赦しはないものと心得よ。ただ「様子変わり」があつて、すなわち事情が変わつて、そうもできぬ場合は、せめてその科にふさわしい償いをその女にしてやら

<sup>37</sup> Yõsu [様子]. *Maneira do negocio, ou do que passa (Vocabulario, f.324v).*

<sup>38</sup> Cauari [変はり・替はり・代はり], Cauaru [変はる・替はる・代はる], Cauatta [変はつた・替はつた・代はつた]. *Differenciarse, mudarse, ou trocarse (Vocabulario, f.44).* «Iõsu gavari» é um substantivo composto de duas palavras, ou seja, «Yõsu» e «Cauari», forma substantivada do verbo «Cauaru», mas não se vê no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* nem no *DICTIONARIUM SIVE THESAURI LINGVÆ IAPONICÆ COMPENDIUM Compositum, & Sacræ de Propaganda Fide Congregationi dicatum à Fratres Didaco Collado Ord. Prædicatorum Romæ anno 1632.*

<sup>39</sup> Niaino [似合ひの]. *Cousa que quadra, ou he conueniente (Vocabulario, f.182).*

<sup>40</sup> Vonajicu [同じく]. *Iuntamente, ou da mesma maneira (Vocabulario, f.281v).*

<sup>41</sup> Tçutome [勤め]. *Obra de ler liuros, ou orar, ou que pertence a saluação. ¶ Tçutomeuo nasu [勤めをなす]. Fazer semelhantes obras (Vocabulario, f.251).*

ねば。同様に、いろいろな空約束でたばかった不犯の女たちに対しては、約束に随ってしかるべき勤めを果たすべし。

*Credas etiam, remittenda tibi non esse peccata, quæ commisisisti deflorando virginem nisi ipsi factam sponsionem adimpleas si nõ sit ita mutatus status rerum; quod hoc sit iam impossibile: tunc enim sufficiet si præbeas prædictæ feminæ alias debitam satisfactionem. Ea quæ promisisti alijs virginibus cures iuxta promissiones factas adimplere.*

Quanto ao pecado de ter violado a mulher casta com a promessa vã de casar com ela<sup>42</sup>, não será perdoado até cumprir sinceramente a vossa promessa. Mas, se a alteração das circunstâncias vos impede de guardar o dito compromisso, terá de fazer-lhe a devida recompensa de acordo com o pecado que cometeu. Da mesma maneira, vossa mercê terá de cumprir as devidas obrigações para com outras mulheres castas que tem ludibriado através de várias promessas vãs.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A QUARTA CONFISSÃO ACERCA DO SÉTIMO  
MANDAMENTO

Zonji nagara nusũda mono vo iasui<sup>43</sup> ne<sup>44</sup> ni ficarete caitoru<sup>45</sup> coto va naranu niotte, sono coto ca, sono atai fodo no coto ca, nuxi ni caiesaide<sup>46</sup> canavanu.

ぞん ぬす もの やす ね ひ か と  
存しながら、盗うた物を安い値に惹かれて買ひ取ることはならぬによつ

<sup>42</sup> Segundo o *Cathecismo Pequeno* de D. Diogo Ortiz, há sete maneiras e espécies da luxúria. O pecado cometido com a virgem encontra-se dividida em duas categorias: «A quinta, com virgem por sua voõtade, que se diz stupro. A sexta, com virgem contra sua voõtade, que se diz rapto» (p.238). O presente acto do confessado poder-se-ia denominar como «stupro».

<sup>43</sup> Yasui [易い・安い]. *Cousa facil.* ¶ *Item, Cousa barata* (*Vocabulario*, f.318).

<sup>44</sup> Ne [値]. *Preço.* Nega tatçu [値が立つ]. *Porse o preço.* ¶ *Itono nega tatta* [糸の値が立った]. *Abriose o preço da seda, ou deuse a pancada.* ¶ *Nega tacai* [値が高い]. *1, Nega yasui* [値が安い]. *Ser o preço alto, ou baixo* (*Vocabulario*, f.179v).

<sup>45</sup> Caitori [買ひ取り], Caitoru [買ひ取る], Caitotta [買ひ取った]. *Comprar, ou tomar comprando.* *Vt, Funeuo caitotte cogui cudarõ* [舟を買ひ取って漕ぎ下らう]. *Comprando hũa embarcação decerei remando* (*Vocabulario*, f.34).

<sup>46</sup> Cayexi [返し・反し], Cayesu [返す・反す], Cayeita [返いた・反いた]. *Fazer tornar.* ¶ *Item, Tornar*

て、そのことか、その<sup>あたひ</sup> 価<sup>ぬし</sup> ほどのことか、主<sup>かへ</sup> に返さいで叶<sup>かな</sup> はぬ。

そうと存じておりながら、盗品を安い値で買い取ることはあってよいことではないゆえ、盗品そのものか、それに相当する金子かを正当な所有者へ返さねばならぬ。

*Quia emere res furatas, eo quod vili pertio venduntur, non potest licite fieri, debent eadem res, vel res æqualis valoris dari corum domino.*

Como é proibido receptor os artigos furtados por serem baratos, deverás devolver aos possuidores legítimos os mesmos artigos ou a importância que é equivalente a eles.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A SÉTIMA CONFISSÃO ACERCA DO SÉTIMO  
MANDAMENTO

p.62/ Fidõ no ribai vo tori motomoru<sup>47</sup> va von imaxime de gozaru niotte, motogane to, mata sono cane de aqinai sureba canarazu möqete arõzuru ri vomo totte, nocori voba soresore no nuxi ni modosaide, toga no von iuruxi ga nai to, Sancto Augustinho no mi cotoba de gozaru.

非道<sup>ひ だう</sup>の利倍<sup>り ばい</sup>を取り<sup>と</sup>求<sup>もと</sup>もるは御<sup>おんいまし</sup>禁<sup>も</sup>めでござる<sup>も</sup>によつて、元<sup>もと</sup>金<sup>がね</sup>と、またその<sup>の</sup>金<sup>かね</sup>で商<sup>あきな</sup>ひすれば必<sup>かなら</sup>ず儲<sup>まう</sup>けてあらうずる利<sup>り</sup>をも取<sup>と</sup>って、残<sup>のこ</sup>りをば夫々<sup>それぞれ</sup>の<sup>ぬし</sup>主<sup>もと</sup>に返さいで、科<sup>とが</sup>の御<sup>おんゆる</sup>赦<sup>な</sup>しが無いと、サント・アウグスチニョの御<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>でござる。

法外な高利を貪り取るのは堅く禁ぜられたこととござるゆえ、そのようにして得た金は、元本と、その元本でもし商いをしておれば必ず獲得したであろう利得とを取り除けたうえで、それぞれの借り手へ返さねば、科のお赦しはないこと、サント・アウグスティーニョの御言葉にあるとおりでござる。

p.63/ *Vsuras verò accipere est res à Deo prohibita: vnde accipiendo tibi tantum capitale, & id*

---

*algũa cousa, ou restituila.* ¶ Tauo cayesu [田を反す]. *Cauar, ou laurar as varzeas* (Vocabulario, f. 45v).

<sup>47</sup> Cf. Motome [求め], Motomuru [求むる], Motometa [求めた]. *Buscar, ou inquirir.* ¶ *Item, Auer, ou aquirir* (Vocabulario, f.167v). Tratar-se-ia da substituição fonética do verbo «Motomuru», que devia ser mais normal, pelo verbo «Motomoru».



## 62

Fido no ribai vo tòri motomoru va von imaximè de gozàru niiotte, mòtògane to mata sòno cané de aqinai suréba canarazu mōqete arozuru ri vomō tōtte; nocòri vōba fore fore no nuxi ni mōdofaide, tōga no von iuru-xi ganai, to Sancto Augustinho no mi cotōba de gozàru.

Saiban mesaruru damiō no cacurete tōtta mōno vo caie-xi, mata sòno ùchi no mōno ni toraxeta mōno mo sòno-arūji ni tori caiefaxeide canavanu. tocacu fito ni naita àta vōba vni mūni navofaide naranu to cocoroiete nanto nari-tomo sòno bun mesareio.

Mata fito no vie vo jasui xi, fōno cōto vōba varū fata tòrinafu vomōtte, sòno fito menbocu ni auareta son qega nando vo, catatta xu no maié de ij mōdofanu cocorōga àru aida ni sòno tōga no von iuruxi va iomo gozàru mai to cocoreiare. Nacāgoto vo iūte chiin no aida ni guijet vo mesareta tocòrode, narū fōdo sono chiinto nacānavòri xite io gozarō made.

Mata fito no tagai no nāca vo chigavaxeta cōto, tēngu no iacu ni nita xiiō fucai tōga de vōgiatta tocòrode, ima iorì nōchi sō xeide, maie no nacachigai vōba chicara no voiōbi faicacu xite, navōfaruru iōni faxerareio.

Fito no fiqi mesareta niiotte vairo ni ùqeta cōto: mata, nani ni tçuqete mo vairo maito tō iocoro va: funa vāchi fidō ni toraruru tocòrode, tāda sòno fataraqi ni ai cānōta bun vo tōtte, nocòru vōba toraxeta mōno ni caiefaide va no guioi de gozàru.

Padre ni iādo vo casu mai to misama no xei mon nitçuite mazzu; cāmi fotòqe va nande monai coto na rēdomo, gentio domo, buguiō, tōno, goxō fama mademo mina no vomo varuru iō va, sadamete tatoiēba Atāgo fachi mán, Amida, nandoni caqete Nanbanbōzu ni iādo vo casu mai to xei mōn xita mōno dōmo va mo faia Christian de ndi; xemete iovai Christian de, vonōzzucara faiō maie nō gotoqu ni narō to micāguitte iuaruru fāzu de gozaru: tocòrode: abunai xei mōnto zōnji mārasuru.

Ni-

## 『コリヤード懺悔録』

特段の見出しはないが、聴罪司祭の訓戒が6点収載される頁。大塚光信架蔵本。大塚光信『コリヤードさんげろく私注』（臨川書店、1985年）より

*quod si praedictis pecunijs negotiatus esses fuisses lucratus, reliquum dominis respectiue est necessarium restituere; sin minus iuxta Sancti Augustini verba non potest esse peccatorum remissio.*

É rigorosamente proibido exigir e cobrar a onzena injusta. Por isso não serás perdoado, como diz Santo Agostinho, se não devolveres a cada um dos devedores todo o dinheiro que ganhaste através da usura, deduzindo o capital e o ganho de que deverías ter infalivelmente gozado se tivesses ter negociado através do dito empréstimo.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A OITAVA CONFISSÃO ACERCA DO SÉTIMO  
MANDAMENTO

Saiban mesaruru daimiō<sup>48</sup> no, cacurete totta mono vo caiexi, mata sono uchi no mono<sup>49</sup> ni toraxeta mono mo, sono aruji ni tori caiesaxeide canavanu. Tocacu fito ni naita ata voba vnimuni navosaide naranu to cocoroiete, nanto nari tomo<sup>50</sup> sono bun mesareio.

さいばん だいまやう かく と もの かへ うち もの と  
裁判めさるる大名の、隠れて取った物を返し、またその内の者に取ら  
せた物も、その主に取り返させいで叶はぬ。とかく人に為いた仇をば有  
む なほ ころえ なん ぶんめ  
に無に直さいでならぬと心得て、何となりともその分召されよ。

そなたが管理している大名の所有物のうち、隠れてくすねた物、さらにはそなたの奉公人にくすねさせた物も、本来の所有者へ返さずしてどうするか。ともかく人に与えた損害は是も非もなく償わねばならぬと心得、とにもかくにも左様しなさい。

*Necessarium est restituere domino cuius redituum administrationem habes, ea quæ occulte ab illo abstulisti, & etiam praëiudicia & damna proximo illata est necessarium in omni euenturefarcire: vnde tu debes similiter facere.*

Dos haveres do dáimio que estás a administrar, não deixes de devolver ao teu dono não só aqueles que furtaste às escondidas mas também aqueles que fizeste os teus moços de casa furtarem. De qualquer maneira

<sup>48</sup> «damiō» in textu.

<sup>49</sup> Vchinomono [内の者]. *Moço de casa, ou de serviço* (Vocabulario, f.271v).

<sup>50</sup> Nantonaritomo [何となりとも]. *Adu. De qualquer maneira* (Vocabulario, f.177).

que seja, percebas que deves indemnizar outrém sem falta pelos prejuízos que lhe causaste e não te esqueças em todo o caso de fazê-lo.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DO OITAVO  
MANDAMENTO

Mata, fito no vie vo jasui xi, sono coto voba varũ sata torinasu vomotte, sono fito menbocu ni auareta son qega nando vo, catatta xu no maie de ii modosanu cocoro ga aru aida ni, sono toga no von iuruxi va iomo<sup>51</sup> gozaru mai to cocoroicare<sup>52</sup>. Nacagoto<sup>53</sup> vo iũte chiin no aida ni guijet<sup>54</sup> vo mesareta tocorode, narufodo sono chiin to nacanavori xite iô<sup>55</sup> gozarõ made.

また、人の上を邪推し、そのことをば悪う沙汰取りなすを以て、その人  
面目に逢はれた損・怪我などを語った衆の前で言ひ戻さぬ心が有る  
間に、その科の御赦しはよもござるまいと心得あれ。中言を言うて知音  
の間に義絶を召されたところで、なるほどその知音と仲直りしてようござ  
らうまで。

また人のことを邪推し、そのことを悪く取り沙汰することによって、その人が名誉上の損害・疵などを被られた場合、貴殿がそれを語った衆の前で、必ずその前言を撤回せねば。そういう気持ちの起こらぬ間は、貴殿の科は決して赦していただけないと心得なさい。不和を引き起こすようなことを言い、知音との間が絶交状態になってしまっているなら、できるだけその知音に仲直りしても

<sup>51</sup> Yomo [よも]. *De nenhũa maneira, com verbos negatiuos. Vt, Yomo araji [よもあらじ]. Não poderá ser, ou auer (Vocabulario, f.323v).*

<sup>52</sup> «cocoroicare» in textu.

<sup>53</sup> Nacagoto [中言]. *Cousas que se dizem de hum pera o fazer quebrar com outro. ¶ Nacagotouo yũ [中言を言ふ]. Dizer cousas que causão discordia (Vocabulario, f.173).*

<sup>54</sup> Guijet [義絶]. i, Nacauo chigõ [中を違ふ]. *Quebrar amizade. Vt, Pedroto Ioãono guijet degozaru [ペドロとジョアンの義絶でござる]. Pedro, & Ioão estão quebrados, ou desauindos (Vocabulario, f.117v).*

<sup>55</sup> «io» in textu.

らうようお努めなさるのがよろしかろう。

*Dum non fit reparatio famæ proximi, quæ denigrata est tuis murmurationibus ex iudicio temerario prouenientibus coram eisdem, quibus eius defectus enarrasti & male loquutus es; considera tuum peccatum non esse remittendum: vnde hoc facias. & bonum erit, si cum illo de quo murmurasti, & estis inimici, amicitiam facias, & ad hoc iuxta vires diligentiam adhibeas.*

Se alguma pessoa sofreu prejuízos e danos relativos à sua honra por fazeres a suspeita infundada e falares mal dela, deves desdizer-te do que tinhas dito dela em presença daqueles que ouviram a tua injúria de palavras. Percebas que não serás perdoado enquanto não tiveres a vontade de fazê-lo. Se quebraste amizade com o teu amigo por dizeres coisas que causavam discórdia, julgo aconselhável tentares reconciliar-te com ele o mais cedo possível.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A QUINTA CONFISSÃO ACERCA DO OITAVO  
MANDAMENTO

Mata, fito no tagai no naca<sup>56</sup> vo chigavaxeta coto, tengu no iacu ni nita xiiö<sup>57</sup> fucai toga de vogiatta tocorode, ima iori nochi sō xeide, maie no nacachigai<sup>58</sup> voba chicara no voiobi saicacu<sup>59</sup> xite, navosa<sup>60</sup> ruru iōni saxerareio.

また、人の互ひの中を違はせたこと、天狗の役に似た為様深い科で

<sup>56</sup> Naca [中]. *Dentro, meo, entre, &c.* ¶ *Item, Amizade.* ¶ Nacauo chigō [中を違ふ]. *Quebrar a amizade.*  
¶ Nacauo nauosu [中を直す]. *Fazer as amizades (Vocabulario, f.173).*

<sup>57</sup> Xiyō [為様]. Trata-se da palavra que não se regista no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, mas é definida pelo próprio frei Colhado de várias maneiras no seu *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*, por exemplo, como «*Praxis, is. Accion, obra. Xosa [所作], xiyō [為様]*» (p.309).

<sup>58</sup> Nacachigai [仲違ひ]. *Desauença, discordia (Vocabulario, f.365v).*

<sup>59</sup> Saicacu [才覚]. *Industria, prudencia, &c.* ¶ Saicacuuo megurasu [才覚を廻らす]. *Vsar de industria, & inuenção (Vocabulario, f.215v).*

<sup>60</sup> Nauoxi [直し], Nauosu [直す], Nauoita [直いた]. *Emendar. Vt, Ayamariuo nauosu [誤りを直す]. Emendar a falta.* ¶ *Item, Mudar a cousa a outro lugar.* ¶ Nacauo nauosu [中を直す]. *Fazer as amizades.* ¶ Rōninuo nauosu [牢人を直す]. *Restituir, ou reduzir o desterrado.* ¶ Iyeuo nauosu [家を直す]. *Endereitar a casa que estaua torta, ou inclinada (Vocabulario, f.179).*

おぢやったところで、<sup>いま</sup>今より<sup>のち</sup>後さう<sup>まへ</sup>せいで、<sup>なちが</sup>前の<sup>ちから</sup>中違ひを<sup>およ</sup>ば<sup>さい</sup>力の及び才  
<sup>かく</sup>覚して、<sup>なほ</sup>直さる<sup>やう</sup>様にさせられよ。

また人と人とを仲違いさせたことは、天狗、すなわち悪魔の所業にも似た、度しがたくも罪深い  
 仕打ちでござったゆえ、今より後は、さようなことは決して致さず、仲違いさせてしまった人と人との  
 の関係を力及ぶ限りの才覚をもって修復させるようになされよ。

*Inter amicos seminasse discordias, & illos fecisse inimicos, fuit peccatum & offitium simile  
 diabolico: vnde in posterum vide ne hoc facias, sed adhibito diligentiam vt illi inter se iterum  
 amicitia copulentur.*

É um pecado extraordinariamente profundo como se fosse o ofício do  
 diabo chamado «Tengu» o acto de teres feito uma pessoa quebrar a  
 amizade com outra, pelo que, deixando de fazer tal coisa a partir de agora,  
 debes usar de todas as invenções possíveis para fazê-los restaurar as  
 relações uma vez quebradas.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM UMA CONFISSÃO ACERCA DO PECADO MORTAL  
 DA «AVAREZA»

Fito<sup>61</sup> no fiiqi<sup>62</sup> mesareta niotte vairo ni uqeta coto: mata nani  
 nitçuqete mo<sup>63</sup> vairo maito to iũ tocoro va: sunavachi fidõ ni toraruru  
 tocorode, tada sono fataraqi<sup>64</sup> ni ai canõta<sup>65</sup> bun vo totte, nocoru voba

<sup>61</sup> Fito [人]. *Homem, ou molher (Vocabulario, f.96).*

<sup>62</sup> Fijqi [最負]. *O fazer as parte dalguem, ou procurar por elle. Vt, Fitono fijqiuo suru [人の最負をする]  
 (Vocabulario, f.91).*

<sup>63</sup> Não se vê no *Vocabulario* a expressão «Naninitçuqetemo», mas esta seria mais ou menos idêntica a  
 «Naninaritomo» [何なりとも], que se define como «Qualquer cousa que seja» (*Vocabulario, f.176v*).

<sup>64</sup> Fataraqi [働き]. *Trabalho, ou seruiço em algũa obra. ¶ Item, Batalha, ou combate (Vocabulario, f.82).*

<sup>65</sup> Ai canai [相叶ひ], Ai canõ [相叶ふ], Ai canõta [相叶うた]. *Vide, Canai [叶ひ], Canõ [叶ふ]  
 (Vocabulario, f.5v). Canai [叶ひ], Canõ [叶ふ], Canõta [叶うた]. Poder. ¶ Vt, Comprirse, ou effectuar-se  
 como desejo, voto, &c. Vt, Nozomi canõta [望み叶うた], l, Guanga canõta [願が叶うた]. *Comprose o desejo  
 ou voto. ¶ Item, Contentar & quadrar. Vt, Cocoroni canõ [心に叶ふ]. ¶ Michini canõta coto [道に叶うた  
 事], l, Michini aicanõta coto [道に相叶うた事]. *Cousa conforme á rezão, ou conforme à regra dalgũa arte  
 particular (Vocabulario, f.35).***

toraxeta mono ni caiesaide va no guioi<sup>66</sup> de gozaru.

人の鼻肩召されたによって賄賂に受けたこと、また何につけても賄賂・  
まいとといふところは、即ち非道に取らるるところで、ただその働きにあ  
ひ叶うた分を取って、残るをば取らせた者に返さいではの御意でござる。

人に鼻肩してやったことによって金品を賄賂として受け取ったこと、また何事につけ賄賂やま  
いがないというものは、とりもおさず正当な理由なく非道に取ったものであるから、ただ貴殿の働  
きにふさわしい分だけを納め、残りはこれを差し出した者へ返さねばなりません。これがデウスの  
御意でござる。

*Ea quæ ex subornatione accipiuntur, siue ex eo quod alicuius fiant partes, & propter quoduis  
aliud subsidium proximo collatum, iniuste accipiuntur: vnde accipiendo tantum ea quæ pro iusto  
labore debentur; reliquum iuxta Dei mandatum debet suis Dominis restitui.*

É muito injusto que vossa mercê tomou peitas, favorecendo um homem  
por ocasião do litígio. De qualquer maneira que seja, o receber peitas não  
é mais nada que cobrar algo de maneira injusta, pelo que deve receber o  
quinhão conforme o valor do vosso trabalho, devolvendo o resto àquele  
que subornou a vossa mercê, o qual é a vontade divina.

#### ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DA OBRA DE MISERICÓRDIA

Padre ni iado vo casu mai to misamano xeimon nitçuite: mazzu; cami  
fotoqe va nandemo nai coto naredomo, gentio domo, buguiõ, tono<sup>67</sup>, goxo

<sup>66</sup> Guioi [御意]. Micocoro [御心]. ¶ Guioini macasuru [御意に任する]. *Conformarse com a vontade, &  
mandado do senhor, ou pessoa honrada.* ¶ Guioi xidai [御意次第]. *Como mãdar, ou quiser o senhor, &c.* ¶  
Guioini caqeraruru [御意に懸けらるる]. *Vir pessoa nobre a minha casa, ou dar me algũa cousa.* ¶ Guioiuo  
vru [御意を得る]. *Receber conselhos, comunicarse, ou perguntar a algum senhor, ou pessoa honrada.* ¶  
Guioini iru [御意に入る]. *Estar em graça de algũa pessoa nobre, ou agradarlhe.* ¶ Guioini somuqu [御意に  
背く], l, Guioiuo somuqu [御意を背く]. *Quebrantar o mandado, ou descontentar ao senhor, &c (Vocabulario,  
f. 118v).*

<sup>67</sup> Tono [殿]. *Senhor de algũa terra, ou que tem criados, ou renda, &c.* ¶ *Item, Marido. Palaura de que  
vsão algũas molheres honradas falando de seus maridos (Vocabulario, f.261).*

sama<sup>68</sup> mademo mina no vomovaruru iõ va, sadamete tatoieba Atago fachiman, Amida nandoni caçete Nanban<sup>69</sup>bõzu<sup>70</sup> ni iado vo casu mai to xeimon xita mono domo va, mofaia Christian de nai; xemete iovai<sup>71</sup> Christian de, vonozzucara faiõ<sup>72</sup> maie no gotocu<sup>73</sup> ni narõ to micaguitte<sup>74</sup> iuaruru fazu de gozaru tocorode, abunai xeimon to zonji marasuru.

パードレに宿を貸すまいと三様の誓文について。先づ、神・仏は何でもないことなれども、ゼンチョども・奉行・殿・御所様までも皆の思はるる様は、定めて喩へば愛宕八幡・阿弥陀なんどに掛けて南蛮坊主に宿を貸すまいと誓文した者どもは、もはやキリシタンでない、せめて弱いキリシタンで、自ら早う前の如くにならうと見限って言はるるはずでござるところで、あぶない誓文と存じまらす。

パテレに宿を貸さぬという三種の誓文について。まず、神・仏に掛けて誓文したことは確かに大した問題ではない。けれども、ゼンチョどもから奉行・殿・御所様に至るまで皆、次のように思うであろう。すなわち、たとえば愛宕八幡・阿弥陀なんどに掛けて、南蛮坊主に宿を貸したりはせぬという誓文をなした者どもは、もはやキリシタンではない。控えめに見ても弱虫のキリシタンにす

<sup>68</sup> «goxõ sama» in textu.

<sup>69</sup> Nanban [南蛮]. Minamino yebisu [南の夷]. *Partes do sul. Vt, Nanbangocu* [南蛮国]. *Reinos da partes do sul* (Vocabulario, f.176).

<sup>70</sup> Bõzu [坊主]. Bõno nuxi [坊の主]. *Religioso que tem sella propria, ou ermida. Item, Qualquer religioso, ou rapado* (Vocabulario, f.25v).

<sup>71</sup> Youai [弱い]. *Cousa fraca* (Vocabulario, f.325).

<sup>72</sup> Fayai [早い]. *Cousa apressada, ou ligeira*. Fayasa [早さ]. Fayõ [早う] (Vocabulario, f.84).

<sup>73</sup> «gotoqu» in textu.

<sup>74</sup> Micaguiru [見限り], Micaguiru [見限る], Micaguitta [見限った]. *Escandalizarse. i, Espantarse, ou estranhar algũa cousa mal feita em alguem de quem se tinha outro conceito* [coneicto in textu] (Vocabulario, f.158).

ぎぬ, と。こうした連中はごく自然に早晚もとの宗派へ立ち返るであろうという, そういう噂を立てさせるようなこの誓文は「あぶない」誓文と存ずる。

*Circa iuramentum de non præstando hospitium religiosi: quamuis Dij gentilium & eorum idola nihil sint, gentiles tamen & ministri regis & ipse rex, omnes credunt, quòd illi, qui iurant per Deos & idola gentilium Martem videlicet, & Amidam & alios, se religiosos non esse recepturos; vel non sunt Christiani, & ad minus, quòd sunt tam debiles Christiani, quod sine alia diligentia, naturaliter ad pristinas sectas conuertentur: vnde quia prædictum scandalum ex tali iuramento sequitur: reputo illud periculosum.*

No que diz respeito aos três juramentos de não agasalhar os padres. Embora seja certo que ter feito o juramento pelos nomes de Cami e Fotoque é uma coisa de pouco momento, todavia, não só os gentios mas também o «Bughiō», o «Tono» e até «Goxosama», segundo me parece, escandalizar-se-ão e espantar-se-ão. Os mesmos dirão que aqueles que juraram de não prestar refúgio aos «Nanbanbözu»<sup>75</sup> – religiosos de Namban – pelos nomes de, por exemplo, «Atago fachiman» e «Amida» já não são cristãos – e caso o sejam, serão cristãos fracos<sup>76</sup> –, e que tais

<sup>75</sup> A palavra «Nanbanbözu» [南蛮坊主] quer dizer “os missionários católicos oriundos de Macau e das Filipinas”.

<sup>76</sup> O sentido da expressão japonesa «Iovai [Youai] Christian» – cristãos fracos – aparecendo no presente contexto deveria ser, segundo creio, assaz difícil de captar – especialmente a partir da óptica ocidental cristã que procura distinguir simplesmente o bem do mal e discernir facilmente aquilo que é justo daquilo que é injusto –, sem uma devida compreensão para com a situação encurralada em que se encontravam os cristãos japoneses perseguidos na primeira metade do século XVII – a maioria esmagadora dos quais não puderam deixar de pisar a «Fumiye» e manifestar a sua vontade de abandonar a fé, mesmo de forma superficial, de maneira a salvar a sua própria vida ou, pelo menos, a dos membros da sua família –, situação essa que é bem simbolizada pelas seguintes palavras que Endō Shūsaku [遠藤周作] (1923-96) faz dizer Kichijirō, uma das personagens mais importantes na sua obra-prima *O Silêncio (Chinmoku)* [『沈黙』] (1966): ‘Porque é que o reverendo Deus me dá uma agonia tão intolerável como esta? Padre, nós fizemos alguma coisa ruim [que mereça a agonia que sofremos]?’ [「なんのために、こげん苦しみばデウスさまはおらになさつとやろか。パードレ、おらたちあ、なあんも悪かことばしとらんとに」] (Endō Shūsaku, *Chinmoku*, Shinchō Bunko, 1981, p.83)

A tentativa de criticar – quer com simpatia, quer sem paixão – a atitude e mentalidade de tais «Iovai [Youai] Christian» já não constitui uma tarefa pertinente ao historiador nem ao filólogo, pois creio inteiramente impossível penetrarmos e conhecermos o verdadeiro coração dos cristãos forçados a escolher



uma das duas hipóteses, isto é, a sobrevivência através da apostasia – mesmo superficial – e a morte decidida por via da inteira manifestação da fé.

Pois bem. Um dos temas mais fundamentais comuns à maioria das obras literárias – inclusive a sobredita obra-prima *O Silêncio* – da autoria do escritor japonês (católico) Endō é a salvabilidade ou não dos crentes «fracos». No que diz respeito à descrição da atitude e mentalidade típica de tais cristãos «fracos» aparentemente pertencentes à maioria esmagadora, segundo me parece, da cristandade japonesa, não se pode encontrar, tanto quanto eu sei, outro exemplo melhor do que a fala que Endō faz dizer Kichijirō. Ele ofereceu ao padre Rodrigo, protagonista do romance, várias conveniências e ajudas de maneira a que este pudesse sobreviver num canto da ilha Kyūshū de forma escondida, mas, por fim, ele vendeu-o, assim como Judas vendera Jesus Cristo, denunciando o local onde se encontrava às autoridades do xogunato, tendo-se deixado cegar pelo prémio pecuniário a ser entregue aos delatores. Cristão «fraco» na típica acepção da palavra, Kichijirō, todavia, não deixa de afirmar ainda não ter abandonado a fé no coração e aparece de forma repetente na prisão onde se encontra metido o padre Rodrigo para pedir-lhe que ouça a confissão. Numa ocasião Kichijirō, tendo confessado ter pisado a «Fumiye» e tendo reconhecido a crença tão forte dos antigos companheiros já martirizados, diz o seguinte na linguagem local de Nagasaki, em voz tão alta para que o padre e os outros cristãos «fortes» metidos na prisão o ouçam bem:

‘Apesar disso, eu é que tenho a minha própria razão. Aquele que pisou a «Fumiye» também tem a sua própria razão. Vós pensais que pisei a «Fumiye» com prazer? Dói-me o pé, pé esse que a pisou. Ah! Dói-me este pé. Apesar de ter-me criado como um homem fraco, o reverendo Deus digna-se ordenar-me que imite os crentes fortes. Isso não é razoável nem legal!’ [「じゃが、俺にゃあ俺の言い分があつと。踏絵ば踏んだ者には、踏んだ者の言い分があつと。踏絵をば俺が悦んで踏んだとでも思つとつとか。踏んだこの足は痛か。痛かよオ。俺を弱か者に生れさせておきながら、強か者の真似ばせるとデウスさまは仰せ出される。それは無理無法と言うもんじゃい」] (Endō, *op.cit.*, pp.178-179)

O padre Rodrigo, perante as repetidas insistências por parte de Kichijirō, foi obrigado a ouvir-lhe a confissão, mas com bastante relutância. Kichijirō faz confissão quase gritando de maneira a fazer os outros crentes ouvi-la:

‘Sim, sou cristão «caído». Isso reconheço. Apesar disso, se tivesse nascido numa época um pouco anterior, teria podido ir ao paraíso como um bom cristão, e teria escapado de ser desprezado pelos outros crentes como cristão «caído». Se eu tivesse nascido numa época sem perseguições..... Que raiva! Sinto raiva!’ [「この俺は転び者だとも。だとして一昔前に生れあわせていたならば、善かあ切支丹としてハライソに参ったかも知れん。こげんに転び者よと信徒衆に蔑されずすんだでありましように。禁制の時に生れあわされたばかりに……恨めしか。俺は恨めしか」] (Endō, *op.cit.*, p.181)

Mesmo que eu não saiba se as palavras acima citadas de Kichijirō são aceites com simpatia e paixão junto dos leitores europeus católicos, afigura-se-me completamente impossível captar o comportamento e

sujeitos voltarão facilmente à sua seita anterior. Julgo perigoso – «Abunai» – o juramento que provoque a dita suspeita e escândalo junto dos gentios.

**ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DA OBRA DE MISERICÓRDIA**

p.64/ Niban no va Deus ni caquete de gozatta to; sari nagara padre ni

mentalidade dos cristãos japoneses seiscentistas sob a perseguição só através do dualismo simples, dualismo esse que procura distinguir aqueles que são «brancos» mártires daqueles que são «pretos» – apóstatas –, ignorando uma camada vastíssima «cinzenta» existente, segundo creio, na história da cristandade japonesa, isto é, aqueles que não se podem tornar mártires nem podem abandonar inteiramente a fé, cujo exemplo típico é Kichijirō.

As autoridades xogunatas de Nagasaki, juntamente com o ex-padre jesuíta Cristóvão Ferreira (já Sawano Chūan), urgem o padre Rodrigo a que abandone a fé, ameaçando que não poderiam libertar três pobres camponeses, os quais estariam a ser torturados no referido momento – apesar de terem renegado por diversas vezes a fé católica –, se ele não pisasse a sagrada imagem de Jesus Cristo. O padre Sebastião Rodrigo, por fim, foi levado a pisar a cara daquilo que mais amava e respeitava, confiando nas vozes que ouviu a partir da imagem de Cristo desenhada na gravura em cobre: ‘Podes pisar. Relativamente à dor que sentes no teu pé, sou o melhor conhecedor. Podes pisar. Vim a este mundo de maneira a ser pisado por vós, e carreguei a cruz de modo a que partilhasse a agonia que sofreis.’ [「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ」] (Endō, *op.cit.*, p.268)

Kichijirō ainda aparece perante o ex-padre Rodrigo, já com o nome japonês Okada San’emon, de modo a pedir-lhe para ouvir a «confissão», dizendo que ainda é possível a Rodrigo administrar-lhe o sacramento. Nessa ocasião Rodrigo tenta explicar-lhe o «intenso prazer e emoção» que teve quando cobriu a cara daquilo que mais amava com os cinco dedos do seu pé, mas em vão. O padre «caído» diz o seguinte a Kichijirō, o qual, já desistido, estava pronto para sair da porta: ‘Não há nenhuma diferença fundamental entre aqueles que são fortes e aqueles que são fracos. Quem poderia afirmar que os fracos padeciam menos do que os fortes?’ [「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できよう」] (Endō, *op.cit.*, p.294). Já o ex-padre não tem hesitação em administrar-lhe o sacramento de confissão, tendo-lhe, por fim, oferecido uma prece: «Vai em paz», com a firme confiança de que ele, mesmo que tivesse traído os religiosos eclesiásticos, nunca traía «aquela pessoa».

iado vo caxi, sono iô<sup>77</sup> vo canaiuru coto va, sôbet go iqen no xosa no uchi bacari de gozare domo, xiavaxe niothe va go voqite no caguiuri ni iri marasuru<sup>78</sup>. Tatovaba, vaga goxô ca tanin no goxô vo tasucaru tame ca, padre vo iobi ioxe, sore ni auaide va no jibun ni, inochi vo vxinôte mo, araba padre vo iobaide canavanu to no go voqite gia tocoro de, nani no iô ga atte mo, voxinabete<sup>79</sup> padre ni iado vo casu mai tonno xeimon no daimocu va, narisômo nai coto to zonji marasuru.

にばんのはデウスに掛けてでござったと。さりながら、パテレに宿を貸し、その要を叶ゆることは、惣別御異見の所作の内ばかりでござれども、仕合はせによっては御掟の限りに入りまらする。喩はば、我が後生か他人の後生を扶かる為か、パテレを呼び寄せ、それに逢はいではの時分に、命を失うても、在らばパテレを呼ばいで叶はぬとの御掟ぢやところで、何の要が有っても、おしなべてパテレに宿を貸すまいとの誓文の題目は、なりさうもないことと存じまらする。

二番目の誓文はデウスに掛けて行なつた由。なるほどパテレに宿を貸し、その便宜を図ることは、一般的には、そうしたほうが望ましいと助言しておく範囲内のことにすぎないけれども、場合によっては必ずそうせねばならぬという掟の範疇に入ることもある。たとえば、お前が己もしくは他人の後生を助かるため、パードレを呼び寄せ、どうしてもパードレに逢わねばならぬとき、たとえ命を失つても、もしいらつしやるならパードレを呼ぶ、というのははっきりと掟にほかならないから、たとえどのような事情があるにせよ、おしなべてパテレに宿を提供せぬという誓文は成り立ちがた

<sup>77</sup> Yô [用・要]. *Necessidade, ou negocio*. ¶ *Item*, Fitoni yôuo yû [人に用を言ふ]. *Pedir algũa cousa a alguem*. ¶ *Item*, Yôuo qiqu [用を聞く]. *Conceder o que me pedem*. ¶ *Item*, Yôni tatçu [用に立つ]. *Ser vtil, & proueitoso: & quando se diz, Xujinno yôni tatçu* [主人の用に立つ]. *Se toma às vezes por morrer no seruiço do senhor como na guerra, &c* (*Vocabulario*, f.322).

<sup>78</sup> «marasaru» *in textu*.

<sup>79</sup> Voxinabete [おしなべて]. *Gèralmente, ou em vniuersal* (*Vocabulario*, f.286).

いことと存ずる。

p.65/ *Secundum verò iuramentum per verum Deum de non recipiendo religiosos, & cum illis non comunicando: etiam si regulariter huiusmodi facere, sit tantum sub consilio; aliquando tamen transit ad præceptum: v.g. quando ad saluationem proximi vel propriam est necessarium vocare religiosum, & cum illo communicare, tunc etiam cum periculo manifesto vitæ, est præceptum de illo vocando: vnde absolute & generaliter iurare, quòd numquam sacerdotem recipies, videtur materia de qua non potest iuramentum fieri.*

Ouvi dizer que o segundo juramento foi feito em nome de Deus. Embora, falando de um modo geral, o acto de agasalhar os padres e satisfazer as suas necessidades pertence à categoria dos conselhos e admoestações a cumprir só se for possível, todavia o mesmo acto cabe na das leis a guardar obrigatoriamente em certas ocasiões. Por exemplo, quando tiveres de chamar o padre e falar com ele de maneira a salvar não só a ti mas também aos outros no «Goxõ», ou seja, na vida futura e se souberes onde ele se encontra, terás que, infalivelmente, chamá-lo e agasalhá-lo. Evidentemente isto não é nada mais que uma das leis eclesiásticas a cumprir sem falta, se bem que te arrisques a perder a vida por causa disso, pelo que, de qualquer maneira que seja, o jurar de não agasalhar os padres em geral, segundo julgo, é aquilo que não poderá ser admitido nem deverá acontecer.

ADMOESTAÇÃO DO PADRE PARA COM A TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DA OBRA DE  
MISERICÓRDIA

Sanban no iacusocu nitçuite mo tairiacu vonaji coto to vomoi marasuru.  
Tocacu miga funbet va aravaita made de gozaru.

さんばん やくそく たいりやくおな おも み ふんべつ  
三番の約束についても、大略同じことと思ひます。とかく身が分別

あら  
は頭はいたまででござる。

三番目の約束、すなわち村の長や奉行に強制されてさような誓文を取られ、約束させられたことについても、大略同じことと思います。以上、私の考えるところを明らかにしたまででござる。

*Idem quasi faciendum est iuditium circa subscriptionem, & promissum tertij generis. & hæc sunt quæ secundum meum sentio iuditium.*

Quanto à terceira promessa, ou seja, ao terceiro juramento que fizeste

de acordo com o mandamento do «Votona», penso que basta repetir a maior parte do que tenho dito na admoestação anterior. De qualquer maneira tenho manifestado o meu juízo e discernimento.